第二美

明治三十七年四月十五日印刷
明治三十七年四月十八日發行

不許複製

紅葉全集第貳卷
定價金壹圓八拾錢

著者　尾崎德太郎
發行者　大橋新太郎　東京市日本橋區本町三丁目八番地
印刷者　石川金太郎　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所　株式會社秀英舍　東京市京橋區西紺屋町廿六七番地

十千萬堂藏版

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

紅葉全集 卷之貳

目次

伽羅枕……

二人女

おぼろ舟……二六七

むき玉子……三四七

紙きぬた

伽羅物語……四七九

女の顔……四九九

花ぐもり……五一九

紅白毒饅頭……五三五

夏小袖……六九
戀の病……八〇

目次　終

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

伽羅枕

（一）

またしても女物語。　京は女藺の名所、とりわけ祇園島原は其粹を萃め、二十四番の風吹絶えずして、千紫萬紅の亂咲には、東夷もおのづから其色に浮れの一節、骨太の手に扇拍子を習ひ、魂忽然とろ〳〵と鴨川の水には刃金の鈍ること奇妙なり、延鏡借りて見よ、小鬢に愧かしき年齡してしげ〳〵なる揚屋がよひ、これも交際と、名はいかにとも附けらるゝものなり、と同役の陰言も聞流して、

浮世はとかく醉醒の水野石見守と云は、江戸麹町半藏門外に人の知る旗本なりけるが、此地に在勤中祇園町東井筒抱への藝子小鶴を我物にして、淺からぬ馴染に綺情は更に盡きねど、役目の年果て近々の別離といふに、杯の數はおのづと減りて、歌へど彈ど樂まざれば、小鶴いぶかしみて子細を問ど語ず、其樣に水臭お心とは知で、京女は馬鹿律義、我に比較べて誰もかうぞと、くやしや仇なる心中立して、見給へ此お腹を、これが假初にも旦那樣憎てなりますものぞと、老人の行屆ける情に、小鶴も戀の外なる戀にはずみて、眞實いとしければこそ、石見が今宵に限りてそでなき隱蔽を涙まじりに恨めば、たゞ溜息吐くを愈々口惜がりて、日頃のお言葉は皆反古か空言かと石見の膝を嚙めば、我も武士なり二言はなけれど、役目濟みて此月半には江戸へ歸へるなり。さればこそ此頃の物思ひ。いとゞ捨て難きに我亂をさへ宿したれば、馬も輿もなか〳〵此心を送難くて、と凋れて二人ともに無言の中に、燈火の小暗き影に小鶴が

泣顔は、露けき小萩が夕月の下に枝を垂れたるごとし。石見物思ひの眼にも少時は美色に見惚れ、これを置去にして再會望なきかと、自失して夢見るごとし。小鶴聲を曇らせ、我はもとより卑賤河竹の流の身、旦那様は奥様おはす御身なれば、行末添遂む心など、有りても所爲なき事、其には露ばかりの希望なく、うか〳〵と今の歡樂は花の七日、いつかは血に泣く思ひと、糾森に先達而杜宇聽にお同伴申せし折の言葉が、我ながら何となく忌まはしく覺えたりしは、まことに今宵の辻占なりけり、此身はともかくも、愁きは胎内の孩子にお顔を見せず、知らするよしなく、人恥かしき父なし子に生れて、簑虫の仇に啼くこそ、とさめ〳〵と涙を流せば、石見は故意と笑ひて、これが死別離といふにはあらず、來年は御用にてまた上るほどに、隨分身を大切に勤めよ、その時壯健なる孩兒の笑顔をも見むと、この度は其を樂みに其を力に一先立歸れば、其方も快心別れてくれ。老父のやうなる我に可厭な顔せず、これまで盡し

くれし情の程は、忘れはおかじ嬉しく思ふぞ、我も此年しての浮氣見ともなければ、止めむ今日は明日はと思はぬにはあらねど、其方がやさしき世話を受くるにつけ、娘のやうに思はるれば、懐かしさの忍ばれずして、つひ無勘辨なる深陷。人の誹譏を聞くにつけ、年効なき老人と其方も愛想の盡る事あるべし。我思ふまゝ自由にして、軈て手を斷り投出す今に及びて、かういはゞ身勝手とも思はむが、其方の爲惡かれとていふにあらねば、老父が置土産と思ふて辛抱して聞てくれよ。およそ勸めの身の女は、年若く色盛りの引手數多あるまゝにおのづと心驕り、相應の客つきて根引せむ、妻にせむと言寄るものありても、上が上にも上を望みて慾には際限なく、男のさほどなる眞實を塵ほどにも思はず、容姿身代に出まかせの不足をいひ立て、冥利といふ事を知らねば、其罰にて良縁數有りながら、慢心に血迷ひて悉く取外し、此方より結婚を急ぐ頃には、男みな背後を向け後退する理、白粉も小皺は紛らせず、酒毒に髪薄

くなりて色蒼ざめ、青年の淫行報いて、惡疾に玉の肌も腐れば、犬も喰ふまじき姿。これがむかし何屋の誰かと驚かざるものなし。これといふも淺ましき女の了簡より、短き色盛の姿を賴みて、法外の吾儘いひ散らせし應報ならざるはなし。其方は今年十九、今を眞盛の花の色、移はぬ間に眞實男見出しなば、金銀姿色に目をくれず、早く見斷りてさる男に添ふべきぞ、島原の遣手輿丁の女房などに太夫の果ありとかや、隨分見苦しき事なり、其方がいとしさに行末まで氣遣はれての意見、仇に聞かば恨なるべし、と益になる事の數々をいひ含て、肴を新ため燗を熱くして、三ッ四ッ對酌して別れけるが、數日の後抱主に二百兩とらせ、小鶴と手切の相談調ひて石見は江戸へ歸りぬ。

（二）

小鶴月盈ちて生落せしは玉を欺く女子なり。初産といひ、石見の紀念といひ、身に世に替へていとしけれど、我を省れば、淺ましや色商賣の身は、年齡一ッを百金にも買うてなりと、生涯十九廿歳に依然たき心願なるに、色香はよしや褪めぬにしても、子持なりとの名立たば忽ちに客落ちて、往時の小鶴にては通るまじ。さりながら子の顏視れば何も忘れて、只道理もなく可愛けれど、思へば愁いやら悲しきやら、その子抱いては置き、置いては抱き、產後の床に居ながら苦勞の種にして持扱ひけるに、四條柳馬塲なる米相塲師西岡屋の內儀祝義にとて見えたり。この女も主人は同じ東井筒の右龍とて、一時は賣りに賣りたるものなるが、西岡屋の重次郎に馴染め、仕盡せし浮氣を括めて、今は世帶持の可なりなる榮耀はしながら、何處にもありと見る苦勞に面影窶れ、さりながら歷とし

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

たるお内儀姿。折々は東井筒にも來て、むかし馴染の今も勤めの女に取巻かれて羨まるゝ身上なり。小鶴は別て親しく、姉と頼みし右龍を見るより幼子を突付け、これ見て下さんせ、水野樣に生寫。どれ〳〵と抱取りて、なるほど爭はれぬもの、口頭からの頤のあたりはお前を其儘。今も床間の人形抱へて、世話燒けぬかはりに樂みなき此身こそ恨めしけれといへば、わが胸の中はそれならで、勤の中の赤子は荷物と、今も今とて其を案じて氣の結ぼるゝ折から。……何にしても苦勞の絶えぬが浮世。姉樣、重樣から音信がありましたか。されば、今月て八月餘りといふに、わづか二通の手紙、いろ〳〵家にも用事溜りたれば、我ながらうるさきぼど狀を出せど、いつも〳〵片音信。ほのかに聞けば、大坂表に遁されぬ博巨利の商賣口、眼前にぶら下りて手の放されぬゆゑにといひ立て、實の所は一時新町に入浸りての揚句は、藝子とやら素人とやらを圍うて、爪彈の膝枕に馴てより、淀夜船の乘心が可厭になりて、いつ歸るやら知

ざる身持と、其に悋氣するにはあらねど、此地は本宅、それを餘所にしての惡性を、いゝわと捨てゝは、お前も知つてのあれほどの苦勞の報酬なく、いかにも口惜しければ、今一度重樣に逢て、少しいひ度事あれど、尋常の狀や使にては戻るまじき氣色なれば、其子を我貰うて生の子にして知せてやらば、鬼でもなき重樣も屹度一度は歸るべし。此前の狀にも、呼戻すべき拵事の種盡きければ、身重になりたりとまで言遣りし事あれば、此子を貰へは好仕合。お前は年も若く年季もまだありて、身體丈夫になり次第花を咲かする身の足手纏。又親方とてもお前の傍には置かせじ。到底知らぬ他人の手に渡さうよりは、西岡屋の子に下さらば、ゆめゆめ麁略なく養育み、眞實の娘にして末々惡きやうには計らうまじ。我手元にあれば毎日この子の顏見にも來られ、我はまた知る通りの子煩惱、必ず案じたまふに及はず。今日わざ〳〵其話に來ましたといへば、小鶴は手を合せて、願うてもなき此方の幸福。わが子なれば氣性我に肖る所

ありて、短慮、不愛想も知れねど、其所は我と思うてゆるして、いとしがつてやつてたまはれ。お前にさへ頼めばいさゝかも氣に懸る事なく、快心勤も成るべしと歡べば、右龍はなほ歡び、さらは今から此子は連れて行くほどに、少時惜別の乳をと小鶴に抱かすれば、乳房を含ませなから、しげ〳〵と子の横顔を視むる眼中に涙を浮べ、放しともなき風情は道理と思へど、右龍はわざと氣剛く、孩子を引取りて立上れば、片手に其袖、片手に乳房を掴みて、せめてはも一口。乳もよけれど過ては其もお腹を損せむ。扨も頑是なき母親かな、この子さへ泣かぬものを。明日また伴れて來るほどに、其樣に未練は出さぬもの。おさらば〳〵。

（三）

幼名は仙よ〳〵と、西岡夫婦に手中の玉と大事がられぬれば、この外に眞實の兩親あることを想はず、七歳八歳から女子のすなる遊藝の數を盡して、其々の師匠取して稽古を勵みぬ。餘所行の服裝には、舞子の姿を寫して往來の足を止め、魂入たる京人形と譽めぬ者はなかりき。是皆女親の指圖にして、其身のむかしをよき事と心得、今は町家のお内儀樣になりても其心失せず、如是躾ること大事の子に自墮落を敎ふるごとし。重次郎も華美好の男なれば、財寶あるにまかせておせんが身の皮を飾りて惜む色なし。京は流石にやさしき所とて、世間を見まねに物識らぬ輩まで、和歌よ蹴鞠よ香道茶湯と持囃す地なれば、是を知らでは上流の交際なり難く、第一人間下司になりて。匂はざる花はさもしかる可しと、風雅の道一通は學ばせけり。和歌の師と賴みしは、當時に聞えし鴨某と

て、重次郎が入魂なりければ、某亦おせんを可憐孃に思ひ、才能は有一節體、容色は拉鬼體と、醉うても譽ることを忘れず。おせん十一歳の秋の暮、重次郎心算齟齬の買置が破産の初手にて、其よりけちが附きたるかして、手を出せばいつも仕損じ、内證空虛になりて外見に知られぬ逼迫、おせんが常綺羅にも肩張るほどの左褄。これではならぬ、今度といふ今度は、市場中の銀を搔浚ひて、一日なりとも持〇と唱はれ、男一代の名聞には、伽羅のわり木を薪にして、珠玉を蒸して喰はでは死なず。大願成就なさしめたまへ、石の大鳥居を寄進すべし、と祇園社へ夫婦代る〳〵日夜の參詣。さて資本というても無ければ、鴨某に事を分けて頼みぬれど、親しき中にも金錢は他人行儀、抵當なくては土藏の錠開き難しとの挨拶。西岡夫婦當惑して通宵の不寢物語、あれか此かと好分別も出ざりけるに、おせんの部屋にて琴の音、夜深に調子冴わたりて聞えぬ。今頃何と思うてかと重次郎いぶかしめば、せんは此頃夜眠られぬ癖つき

て、それゆゑの排悶なるべし。それよそれよ思ひつきたり、あの琴音のぬしを一時の抵當に、鴨様より銀借りたまはゞ如何にといへば、十七八ともいふならばともかくも、乳の臭失せやらぬ仙が何の益にか立つ可き。いえ〳〵きつと抵當に不承知なき理由は、我鴨様へ參る度に、先生のおほせらるゝは、せんは容色といひ、才といひ、藝といひ、いづれにも微瘕なき子なり。われ不幸にも今にして老後の樂なきを常に憂く思ひて、養子養女を頼みおきたるが、心に合ふもの今に一人とてなし。さるに欲しきはせんばかりなり。外に子持の西岡殿ならば、無理にもあの女は貰ひうけたきものなれどと、心底欲しさうな口上なれば、明日行て、抵當にとて此方よりまをし出て差上ぐ可き物もなければ、今は瓦解の姿なる我家に何もなけれど、此ならばとお望の品もしあらばとほのめかして見たまへ。彼方にてはかねての希願この時と、必らずせんの事をいひ出したまふ可し。これは身賣といふにはあらで、一時凌ぎの方便なれば、氣

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com